

令和5年度第3回島根県総合教育審議会

日時：令和5年10月6日（金）

13：30～15：30

場所：サンラポーむらくも 瑞雲の間

○会長

第1回の審議会のときに、野津教育長様からいわゆる諮問をいただきまして、それに対してこの委員会の役割は答申を出していくということになるかと思えます。江津地域における今後の県立高校の在り方についてということで答申を出す方向で考えていきたい。前回、第2回では、4人の地域の方々の御意見を聴取してきたというところでございます。

前回、一応あらあらの結論としては、2校をそのままの形で現状維持なり、あるいは縮小なりで存続させるという方向性ではなくて、この際、何らかの形での統合を行って、そして新しいコンセプトの高校を1つ立ち上げてはどうかということで、大方の意見が一致したというところを確認させていただいたところでございます。これに基づきまして、それではどんなタイプの、どんな感じの、どういう内容のというところに今日踏み込んでいければいいかなというふうに思っているところです。

本日のたたき台となるところの事務局の原案について、まず御説明いただいて、そこを足がかりに議論を始めたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局

お手元の資料を御覧ください。江津地域の今後の県立高校の在り方についてということで、まず1つ目、諮問させていただいた基本的な方針（案）を再び載せております。6つポツがございますが、その下の新設校イメージのほうを御説明させていただきます。

新設校のイメージとして、想定される学びが2つございまして、進学を念頭に置いた普通科系の学び、工業教育のさらなる魅力化で、進学を念頭に置いた普通系の学びについて、文系進学、それから看護・栄養・保育などの資格職を目指す進学コース、2コースを1学級40名で、工業教育のさらなる魅力化のほうは、機械系、ロボット制御系、建築系、電気系、2学級80名相当でというふうな新設校イメージを案として諮問させていただいているところです。

2番目、これまでの審議会での議論として3つポツを挙げております。新しい教育の在

り方に挑戦するという点で新設校のほうがよい。2ポツ目、子どもたちが魅力を感じるような学科を設置する。3ポツ目、江津高校と江津工業高校が築いてきた学びを生かしつつ魅力的な学科とする。

2ページ目を御覧ください。本日の議論のポイントとして2つ挙げさせていただいております。

1つ目は、学科設定と定員のバランスについてでございます。例えばということで、案1、案2をお示ししております。

案1は、進学を念頭に置いた学びを60人定員として、工業系を60人定員とする。ポツとしまして、進学を念頭に置いた学びにおいて、理系進学や地域についての学びに対応するコースを設定する。2つ目のポツとして、工業科は60人定員で、機械系、電気系、建築土木系の3つの学びとする。これにつきましては、前回の地域関係者の意見聴取の部分も参考にさせていただいているところでございます。

表の下に米印が書いてございます。1ページ目に挙げさせていただいた基本的な方針(案)に比べて、工業科の定員が少なくなります関係で、常勤の教員が2人程度少なくなるのではないかという可能性がございます。

案2です。案2は、進学を念頭に置いた学びを80人定員として、工業系を40人定員とする。1ポツ目、同じ内容でございますけれど、理系進学や地域についての学びに対応する。2ポツ目、同じ内容でございます。機械、電気、建築土木の3つ学びとするということで、80名、40名の枠を下につけております。

米印にございます。これも工業系の定員が40と減っている関係上、常勤講師が5人程度少なくなるのではないかという可能性がございます。

3ページ目、御覧ください。(2)新設校設置によって生まれる新たな学びについてでございます。

①普通科系と工業科が併設されることによって得られるものとして、3つポツを挙げてございます。1つ目のポツ、普通科系の探究学習に工業科の知識、技術が加わり活動が深まることや、工業科の課題研究に普通科系のアイデアが加わり新たな物づくりができる。例えばということで、普通科系の探究学習で独り暮らしの高齢者が必要としているものについて調査した。その調査の結果、新たな道具のアイデアが生み出され、それを工業科の知識、技術で実現したと。こういうような学びが例えば思い浮かぶのではないかとということでございます。2つ目のポツ、普通科系の生徒が工業系の資格を取得し就職することが

できる。例えば、普通科系の生徒が電気工事士等の資格取得を目指すことができるのではないか。3つ目のポツ、工業科の生徒が普通科系の生徒とともに進学指導を受けることができる。例えば、工業科の生徒が島根県立大学等に進学する、これは恐らくその地域の課題解決などの学習を通じて、そういったものの意欲であったりとか実現に向けた努力が備わってくるのではないかという想定でございます。

②島根県立大学、ポリテクカレッジ島根との連携によって可能になる学びをイメージ図にしてございますので、裏面の4ページに当たりますけども、カラーでイメージ図を御覧いただければと思います。図の下、ちょっとオレンジ色っぽいところに、新設校の内容を載せてございます。資格職を目指す進学コース、進学を目指すコース（文・理）、地域課題を探究し進学を目指すコース、機械系、電気系、建築土木系という新設校でございます。図の一番下の枠に4つポツがありますけども、これは先ほど御説明した内容が、3つポツだったのが4つポツになって書いてございます。融合による学びとして4つのポツを挙げております。

連携をイメージしてみますと、上の水色の部分、島根県立大学、それから上の黄色の部分、ポリテクカレッジ島根と。新設校から普通科系の学びを通じてポリテクカレッジとか、機械系の学びを通じて県立大学とかいう、斜めの矢印もあるかと思うんですけども、ちょっと太めの2本の矢印にさせていただいています。真ん中の白い部分でa、b、c、d、e、f、g、hというふうにあるのが、想定される連携のイメージでございます。

a、探究活動、課題研究を協働で実践できるのではないかと。b、先行履修・単位取得などの可能性があるのではないかと。c、7年間のスパンで地域課題を探究・研究する、そんな構想もできるのではないかと。d、メンタープログラムとあって、大学生もしくはポリテクカレッジの学生が高校生に与えるメンターとしての役割が導入されるのではないかと。e、短期大学部志向のニーズに対応できるのではないかと。これは松江キャンパスに短期大学部がございますので、そのように入れさせていただいています。f、連携した探究・研究、これはaと内容的には同じような話になりますけども、こちらにも書かせていただきました。g、施設・設備を共用できるのではないかと。ポリテクカレッジの施設・設備、それから新設校の施設・設備、これの共用についても可能性があるのではないかと。あわせて、合同授業ということで、fとgと重なるような関係性はあるかと思うんですけども、そのようなことも考えております。

真ん中、太字で書きました、3校に共通する方向性として、地域の子どもを地域で育て

て地域に返すような、そういった共通方向性を持ちながらの連携ができるといいなというところがございます。

3 ページに戻りまして、4 番、今後の検討に当たっての留意事項ということで、3 つポツを挙げてございます。1 つ目、開校まで、または開校後であっても、地域や社会のニーズを捉え、時代に合った魅力ある学びとなるよう柔軟に対応し、必要があれば見直す。これは基本的な方向性を定めた後、詳細を考えるに当たって配慮をしていく、留意していくポイントだというふうに考えています。2 つ目のポツ、パブリックコメントを実施するなど、地域の声を聞く機会を持つ。3 つ目のポツ、学びの内容の具体を検討する際には、生徒や地域の中学生の意見も踏まえるというようなことを留意事項として挙げております。

以上、審議会の資料の説明とさせていただきます。

○会長

ありがとうございました。

御質問等というふうに言いたいところなんですけど、ちょっとまず基本的なというか基礎的なところで、多分皆さん共通の疑問があると思いますので、そこを私のほうから少しお尋ねをしてみたいと思います。

まず、1 つの疑問は、普通科と言わずになぜ普通科系と言っていますかという疑問が多分皆さんの中にあると思いますから、そこを1 点、お尋ねしておきます。普通科なら普通科、工業科なら工業科とさえいいのに、普通科系というふうにわざわざおっしゃっている理由を伺いたいというのが1 点です。

それから、2 点目が、1 学年当たりの人数についてはいずれの案も1 2 0 ということで、同一であるということですね。現在は、江津高校のほうで1 学年でいえば4 0 の2 学級の8 0、江津工業も同じで4 0 の2 学級の8 0、合わせて1 6 0 ということのを1 2 0 人規模にしてはどうかという、トータルの合意、お話がひとつ前提としてある。その上で、どっちを何学級にするのかの話があるんですけども、その際に、案によって教員の数の上がり下がりがありますよと。この辺がすごくテクニカルに分かりにくいところなので、教員の数、結構大事でございまして、どれだけの教科がカバーできるか、どれほどの子どものフォローができるかみたいなことで、すごく教員数は大事ですので、同じ1 2 0 という数なのに教員数が上がり下がりすることの理由は何ですかということについて、私のほうからちょっと代表としてお尋ねしたいと思います。よろしくお願いします。

○事務局

1つ目でございます。普通科系という表現をさせていただきます。現在、江津高校は普通科でございますけども、ここでは普通科系という表現をさせていただいたのは、県内、他校でもあります総合学科における普通科系の学び、それから、これはつい最近、文科省がスタートしたんですけども、普通科改革の中で地域の学びを重視する地域連携型の普通科、新しい普通科というものがございますので、選択肢として、現在限定することなく普通科系という表現で統一させていただいております。

2つ目、2学科合わせて120定員を想定しているのは、新設校であるならば開校する時期は令和10年度前後を基本的な方針（案）で想定しております。令和10年度前後の両校の入学の推計をしているところですけども、100名程度をおよその推計値として持っております。また、出生数まで追っていくと100人程度の市内出生数が見込めるということで、そういったものをもろもろ踏まえて120定員が相当であろうというふうに事務局としては考えております。

最後に、教員定数につきましては、これは学校規模によって教員の定数が定まってくるので、およその配置数はまた別物であるんですけども、大体25から30名程度の配置数の中から常勤教員が、この工業科が少なくなると少しずつ配置数としても減っていくという形で、そちらに2人とか5人とかというような減を想定しているところでございます。

標準法という法律によって教員配置が決まってくるんですが、1つの学校に対して校長、教頭というのが1人ずつ、校長は1人ですけど教頭は規模が大きくなると2人の場合もございます。教員数が普通科のコースの完成規模に応じて割り出されるのと、工業科の完成年度の規模によって教員数が割り当てられます。およそ、全てが工業科で3学級であれば教員数は30であろうという想定ですけども、全てが普通科であれば25であろうという想定の中で、さらにプラスして実習助手とか養護教諭とかいうようなことはあるんですが、正教員数としての配置数を今、下のほうでお示しさせていただきました。

○会長

ありがとうございました。

これは、いつも標準定数の問題は引っかかるというか、特に地域の子どもの数が減っている学校でのその議論をするときには必ず引っかかってくるもので、学校の教育環境に関わるんですけども、やはり子どもの数が減ってくると学級数が減る、学級数を減らすと教員定数が減るという、そういう関係になっていて、その辺をどういうふうに確保するかということで県も苦勞しておられるというふうに理解をしております。

以上、私のほうで代表的な質問はさせていただきました。120という数については、現状、両校が1学年80、80のところ、160の定数があるところを、江津高校に大体60、工業に50ということで、大体年間110ぐらいの人数が今行っている。現状、中学校の卒業者数が130から140ぐらいで推移しているのが、ここから10年間の間に恐らく110人前後になっていく。その状況を考えたときに、120という数でスタートしてみてもどうかというのが原案になっていると、こういうお話でございました。

皆様のほうからというふうに思いますが、どちらからいきますかね。今日のページ数でいうと2ページのほうからいくか3ページのほうからいくかということで、3ページのほうがどっちかといえはいわゆるアイデアっていいまいしょうかね、両方いわゆる普通科系の学びと工業系の学びをクロスさせることや、あるいは県大やポリテクカレッジと交流することでもう少しアイデアのある新しい学校の形態ができないかといったような、アイデアの話になっているんですが、そのことと、それからその前のページにある、何学級何人でいくのかという話はちょっと質の違うところがありまして、この審議会としては、後ろのほうの案は、いろいろ並べていろんな考え方があの中で活気のあるいい魅力的な学校にしましょうよということは、3ページ目にあるアイデアをいろいろ言っていたことでできると思うんですけども、シビアな問題はむしろ2ページ目のところにございますので、そこについて少し御意見をいただきたいと思えます。こっちのほうがやっぱり嫌な感じが夢のない議論になってきます。

今あったように、普通科系の学びのほうで何学級、それから工業。工業はこの工業のままいくのかっていう問題もありますけれども、前回のお話では、やはりこれまで培ってきた工業系の学びについては保存してほしい、これを強みとしてほしい、地元への人材を供給する元になってほしいというお考えもあるので、こういう形になっているというふうに理解しております。

それでは、ここについて、まず御意見をいただきたいと思えます。いかがでしょうか。

○委員

江津工業の保護者としての意見を言わせていただきたいと思えます。

令和元年から令和5年度の入学者なんですけども、機械・ロボット科は10名から25名で、建築・電気科は16名から40名です。それをさらにコース別に分けますと、令和元年から令和4年度の入学者で、機械コースは11から17名、ロボットコースはゼロ名から12名で、ロボットコースにおきましてはゼロ名の年もありました。そう考えると、

今後は機械科の1つでもよいと私は思いました。また、建築コースにおきましては13名から25名で、電気コースは3名から22名となっております。どの科やコースも年度によってばらつきは見られます。

そして、最終的に言いたいことは、令和元年から令和5年度の入学者は、少ない年で41名、多い年で55名と、60名まで達していませんので、工業科は1つにしてもいいのかなと思いましたが、この案の1で普通科60名の2学級、工業科60名の2学級だと、少人数でゆとりを持って学習ができるのではないかと私は思いました。

また、建築土木系と、土木系も学べるとなると、もしかしたら工業に入りたい生徒も増えるかもしれないと思いましたが、私はほかの方々の意見もお聞きしながら、また結論というか、決めていきたいなと思います。

○会長

今の御意見は、工業の最近の各科、系における志望数っていいでしょうか、それから人数の推移なんかを見ると、1学級の設置でもいけるじゃないかと、その1学級、何人ぐらいですかね。

○委員

1学級は、多いところでは40名、少ないところでは11名です。現在、3年生は三十七、八名で、建築・電気が。機械・ロボットが11名と、ちょっと差があり過ぎる。なので、1クラスでもいいかなとも思ったりもするんですけど、ゆとりを持ったというか、今、建築土木系っていうふうに挙がっていますので、もしかしたら土木を学びたいという子もいるかもしれないですし、普通科系2学級にするっていうと、やっぱりゆとりっていうか少人数での学習になるから、先生も生徒もゆとりを持って学習できるんじゃないかなというふうに思うと、60、60の120がいいかなと私は思います。

○会長

ありがとうございました。

そうですね、ちょっとこれは私がよく分かってないのかもしれないんですけど、例えば1学級でも系が3つあるということになると、入ってから自分は何の系で主に学ぶかを選択して系列ごとに学ぶというか、学級としては1つだけ選択によって系が分かれるということになるのでしょうか。

○事務局

他校といいますか、これまでの県内の構成といいますか、こういった形で2学級募集し

て3つのコースにというような場合、大きく2つありまして、1年生の間は共通で2年生から分かれていくケース、それから、また途中の段階で希望を取って分かれていくケースとあります。

○会長

ありがとうございました。

なかなかこれは難しいところで、高校段階でどのぐらい、いわゆる専門分化っていう、最近、レイトスペシャリゼーションという言い方で、いわゆる専門化になっていくのを後ろに回すというのがあって、昔はかなり早期から、ある固まった専門化になっていくパターンだったんだけど、この辺がどうなのかなということと、それから、多分先ほど出てきたポリテクカレッジが今、3科あって、1つは生産技術科、今、お手元にあるように。それから電子情報技術科、それから住居環境科というふうになっているので、この3つの科と現状、対応したようなつくりになってるねということは見たら分かるということですね。

名前の問題はちょっとあるので、建築土木系が今いいのかみたいなことはちょっと考えたりもするんですけども、その辺りは今後の課題として、今、〇〇委員さんからは、現状を踏まえて各系がこのぐらいの現状、人数なので、学級の数としてはこんな感じじゃないかという御意見をいただいたところでございます。

皆さん、いかがでしょうか。

○委員

先ほど説明していただいた教員の人数の、正規教員の配置の人数に関して、私はそこにこだわっていくべきじゃないかなと思うんですけども。どんな学校でも、普通科と言われるところの方も専門学科に行っている方も、もう本当に教員数が足りないことで可能な活動ができていないというか。この前の議論の中でも、いろいろ新しい取組を企業と連携してやっていくというようなことも構想の中にある中で、教員数が1人でも2人でも多いというのは、できることが増えていくっていうことと直結すると私は考えていて、もしこの基本的な方針のところでは一番教員数がたくさんもらえるっていうことがあるとしたら、この枠組みの中でどういうふうにしてその科を組んでいったらいいかだとか、生徒に進路指導していったらいいかというのを考えるっていう、先に教員を確保するほうが先でという考え方がいいんじゃないかなと思います。

○会長

ありがとうございます。非常に大切な、専門家的な意見ということですよ。私たち、

つい様々な夢を追いがちといいましようか、そうなるんですけども、例えば今、もともとの基本的な方針案では、普通科系が1学級で工業系が2学級ですよ。それが、次の今日の案1になりますと、2学級、2学級なのに常勤の先生が2人減るという事態ですよ。これ、何か普通、ええっていう感じになるんですけども、本当にもしこうなら、やっぱり教員が2人減るのは結構大きくて。という御意見でございました。

事務局、そこ間違いないですかね。

○事務局

教員配置についてですけども、同じ規模であると、普通科系の教員配置よりも工業系の教員配置のほうが多いです。ですから、先ほど極端な話、もし3学級の工業科であれば30、もし3学級の普通科であれば25という御説明をさせていただいたんですが、工業科の割合が小さくなればなるほど、どちらかという教員の数は減っていくというような形になっております。

○会長

さっきの質問は、基本的な方針案のところとその次の案1は、工業科の学級数は変わらず、かつ普通科が1学級増えているのに、教員数が2人少なくなるというのはどういう仕掛けですか、です。

○事務局

1年から3年まで完成した段階の総人数が、案1の場合であれば普通科が3掛ける40の120で、工業科が3掛ける80の240というのが、要は算定の基になります。

2ページ目の案1の場合は60掛ける3で普通科が少し増えて、工業科が60掛ける3で少し減ると。

○会長

これは学級数というよりも、その人数が。子どもの人数、60と80の差の20が3年間たつと効いてくるという、こういうお話でございませぬ。というあたりを少し考える必要もあるということ。

〇〇委員は、やっぱりそのところはかなり重要な条件ではないかという、そういう問題提起をしていただいたところでございます。

多分、県のほうは、いわゆる国の決めた定数以外にもいろいろ御努力をしておられて、多分、県単で工夫をしておられるところも地域の高校に対してはあるんじゃないかというふうに思うんですけどね、それを最初から予定するわけにもいきませんので。

ほかの御意見いかがでしょうか。

○委員

まず、〇〇委員の意見と近いつていうか、やっぱり先生の確保というのがすごい大事だと思うので、この案1か案2かでいくと、やはり多くの先生が確保できる案1のほうが良いというふうには思いましたというのがまず1つ。だから、大前提としてしっかり先生を確保していくということが大事だと思いますということと、あと、普通科系の学びのところとかに関しては、私も見ていて非常にわくわくするような、何かそういったコースが設置をされているので非常にいいなというふうには思いながらも、一方で、工業科のほうに関しては、あまりこれまでとそんなに大きな代わり映えがしないような印象があって、特に全国的に今、課題は、特に女性の理工系に進んでいく方が少ないということが国を挙げての課題になっているというところを考えていきますと、先ほど会長もおっしゃっていましたが、建築土木みたいな名前ですとなかなか女性が、女子の学生が取っつきづらいというようなイメージもあるのかなというふうには思いますので、全国的には例えばインテリアですとかデザインですとか、そういったものを入れていくと少し見え方も変わってくるんじゃないかなと。当然、その中身の学びも変えていかなきゃいけない部分はあると思うんですが、何かその辺はまだ工夫の余地があるのかなというふうには思いました。

1つ、ふと疑問に思ったのは、先ほど普通科系の学びで総合学科の選択肢もあるというお話があったと思うんですけども、そうなったときには、もう工業科もひっくるめて総合学科という1つで、その中に工業系とか普通科系、探究系とかっていう選択肢もあるのかなというふうに思ったんですが、先ほどの話だと、そういうふうな選択をすると、また先生の配置の数が減ってしまうとかっていうお話なのかなというふうに理解をしました。

○会長

おっしゃるとおりで、一つには、地元の強い要望もあって、やっぱり工業というところについては一つ専門性をしっかり残すべきだという議論と、総合学科の中に工業科を取り込むというような考え方の総合学科の設置の仕方はあるんですけど、そういう方式は取らないということで、普通科だけではなくて、そこからもう少し幅広い、例えば商業的なものを学べたり、それから農業的なものを学べたりというようなことでの総合学科、あるいは看護・福祉系を学べたりといった、そういう総合学科というところを考えてみたらという、そういうアイデアではないかなというふうに思うところです。

ほかにかがでしょうか。

○委員

これ、一番最初の案1ですかね、これがずっと示されている形が出ていて、今日新しく2つの案が出されているんですけども、先ほどから教員の配置ということで、学校の先生はたくさんいればそれだけ生徒たちも選択肢があると、確かにそうだなというふうな思いもあって、ああ、というふうに思ったんですけども、最初に出された案の話でいくと、普通科系が1クラスで工業系が2クラスで、そのときに先生がたくさん配置できるよという話なんですけど、じゃあ実際に将来、今、令和10年ぐらいを目標にしたときに、ちょっと生徒の割合ですよ、普通科系1に対して工業系が2の生徒数が見込めるのかというところもちょっと疑問ですよ。今現状は恐らく逆ですよ、今の状態だと普通科系が2に対して工業系が1の割合ぐらいなのかなというふうに思っていて、これが新しく新設校になったら割合が逆転するっていうことがあるのかどうかというところ、その辺を見通しがあってこういう案を出されているかどうかというところがちょっと一つ疑問に思うところですし、あと、ちょっと内容についてはこれからいろいろ精査されるのかなとは思いますが、工業系とかの話に対して、今、今後例えばSEっていうんですかね、システムエンジニア、あの辺りというのの人材が相当足りなくなるっていうところがあって、例えばそういう子たちというのは、この今、江津にそういう子がいるとは思いますが、それになるとするならどこに入るのかな、もしくは市外のほうへ行くのかなという、その辺りっていうのもどういうふうな考えがあるのかなというのをちょっとお聞きしたいなと思いますけど。

○会長

事務局のほう、原案の提示のところ、現状、充足数ということでいえば、江津高校のほうで充足数が高く、8割近いですよ。それに対して江津工業はなかなか子どもが来ないという現状がある中で、このクラス数の逆転、あるいは40・80、あるいは60・80という比率にして大丈夫かという、その見通しはいかがかという御質問でした。

○事務局

新設校イメージ、基本的な方針（案）、1ページの諮問のときの案を出させていただきました。その将来推計的なものを言うと、確かに普通科系の志望のほうで将来推計的には数字は多いです。これは過去5年間の充足状況、各中学校から高校に流れる、進学する者を基にして推計値出しているもので、それは委員おっしゃられるように、進学を念頭に置いた学びのほうに生徒数は多くなっています。

ただ、率的に1対2かっていうと、ちょっとそうではないんですけど、この最初のイメージの案で、普通科系が1学級40、工業系が2学級80としましたのは、コースの数が基にございます。普通科系のコースを文系進学と資格職を目指す進学という2コースにした。それから、工業教育のさらなる魅力化として4つの系を持ったという、単純にその2つのコース、4つの系ということで、120という定員の中で40、80という形を出してございます。

それが、2ページ目にあります案1とか案2という形になったときにどうかということですけども、普通科系、それから工業系、将来のことはなかなか見通すのは正確には難しいんですけども、それぞれ収容はできる数字にはなるのではないかというふうに思っております。

情報系、SEのほうですけども、SEは高校すぐにはなかなか難しく、どうしても上級進学があった上で資格を身につけるという意味で、それからまた、普通科のプログラミングの学習とかも小・中と進んでいる関係で、もしSEを目指すのであれば、やはり進学を意識した形になるのではないかなというふうに考えているところでございます。

○会長

ありがとうございました。

いずれにしても進学は必要でしょうけど、そういうところの基礎的な学びに持っていくってことは一つの魅力になり得るので、そういった見せ方はあるなというふうには思いますね。

現状、第1回目の資料のところ、補足資料の中で出てきた話ですが、現状、江津工業高校の学生さんたちが、卒業してポリテクに行っている人の人数みたいなものっていうのは、大体多い年で4人なんですよね。1人とか、2人とか、4人とかっていう人数がポリテクのほうに、進学っていいでしょうか、しているという格好になります。

それから、大学のほうには、4年制大学の理工系にもやっぱりこの頃ちょっと増えてきていて、1人ぐらいだったのが、8人とか5人とかという人数で、少し片手を超えるような人数になってきているということで、やっぱり最近の理工系の傾向として、高校卒業だけで就職するよりは、さらに進学をして付加価値をつけてという方向にあるので、そういった方向へ向けても、今後は工業科も進んでいくものと思われまますので、そのベースがやっぱりできるような学びの配置にしておく必要があるなということちょっと感じたりもいたします。

ほかにかがででしょうか。

○委員

普通科と工業高校の定員の配分の問題なんですけども、確かに地元の中学校卒業生のニーズは普通科のほうが多いということなんですけども、一方で、地域社会との関わりでいきますと、江津は昔から工業が非常に盛んな地域で、工都と言われた時代がありました。昭和30年代から40年代にかけてはかなり工業の生産が活発で、そういった工都という名前もついたほどなんですけども、最近、人手不足が非常に深刻になっていまして、県内の高卒の新卒者に対する求人倍率というのが過去最高になっているんですよ、去年、今年あたり。それで、非常に地元の企業としては高校の新卒を採りたいんですけども、なかなか採れないと。もう中には、何回求人を出しても採用できないのもう諦めたといった方の声も聞いていまして、非常に切実な問題があるんですね。それで、県としては、島根創生計画ということで、若者の地元定着、あるいは県外から帰ってくる、そうした政策も一生懸命やっているんですけども、そういった地域のニーズ、やっぱり高卒の新卒の人材が欲しいと、中でも工業系ですね、やっぱり工業高校に対するニーズというのは非常に高いわけですね。それで、生徒の意向は普通科志向が強いんですけども、地域経済界はやっぱり工業高校の新卒者が欲しいと、本当に喉から手が出るほど欲しいと。私もそういった地元企業の方の声を聞くんですけども、なかなか今、地元の工業高校の新卒を採用しようと思ったら非常にハードルが高いというんで、非常に地域経済からのニーズが高いということですね。

そういった切り口からしますと、私、やっぱり基本的な方針にある普通科1、工業高校2学級、これが地域経済のニーズに応える最適な案ではないかと、やっぱり地元で定住する若者を増やす、そういった施策の方針に沿うものでもありますし、私はやはり、特に地域経済のニーズに応える面からすれば、基本的な方針案が一番ふさわしいというふうには思っています。

○会長

ありがとうございました。

地元の経済界のニーズや産業界からのニーズというところを踏まえて、工業系の定員を減らすという形にはしないほうがいいんじゃないかという、そういう御意見だったと思います。ありがとうございました。

ほかにかがででしょうか。

○委員

皆さんの意見を聞きながら思ったんですけど、普通科系の学びといたらやっぱり上を目指す学びというか、上を目指す子どもたちが学ぶところであって、また、工業系はやっぱり物づくりというか、力をつけるための学びというところで、何かこの2つの学科がどういうふうと一緒に学べるのかなっていうことをちょっと考えながら、それは何か楽しみだなというふうには思いましたけど、やっぱりこの読み方、機械系とかそういうものが、今の子どもたちにはずっと言われているような名前、機械系とか電気科とかあるんですけど、もうちょっとそれを言い換えた感じの何か新しいものでコースを定めていくと、ここはどういう学校なんだろうというふうにもっと興味を持ってもらえるような学校になるんじゃないかなと思います。

○会長

ありがとうございます。

魅力的なネーミングもすごく大事なところですよ。もちろん看板だけじゃなくて中身を充実させるということですよ。

○委員

おっしゃったとおりで、本当にネーミングが大事だと思うんですけども、一番初めの、工業の人数を増やすと教員数が増えるという、あそここのところは見せ方でいいと思っていて、ここにあるような進学文系と工業というところのこの垣根がもうちょっとなくてもいいと思っていて、提出する書類の中では、これだけ工業系がありますというのを出すことによって教員数は確保するんだけど、実際には、例えば看護だとか保育、栄養、この辺もICTを使って、すごく保育というのをAIとかいうところと組み合わせるといところからも、この工業の要素を入れるということは可能だと思っていて、そういうことで、その辺も工業というふうには書類としては出すんだけど、内容としてはそれほど工業の色が強くないということも可能だと思っていて、なので、一つの意見としては、まずは、この工業の数は多いように出すことによって教員を確保する。内容としては、もうちょっと工業関係でも、前回の資料でも、大学に行くというレベルを期待しながら自分たちの地域の企業を発展させたいんだという、そういうニーズがあるということも伺っていたので、この中学生の段階で、自分は高校を卒業してから就職するんだとか、そういうことを考えられる子どもって実は少ないんじゃないかと思っていて、今、普通科を選ぶ子どもが多いのは、この先、自分がどうしたらいいのかっていうのを、どうしたいのかも含めて、中学校

段階で選べないから、結果的に、工業ではないな、普通科を選んどこうという、そういう選択肢だと思っているので、松江の南高校が探究科というものを提示してすごくたくさん子ども引きつけたという、ああいう前例もあるので、ネーミングでこの機械だとか電気というものを、先ほどおっしゃったようなこのインテリアというところに一つキーワードにして、文系でも理系でもあり得て、さらに進学もあるというようなことを含めて、だから、その枠組みを決めた上で、工業とか文系だとか、進学するしないという垣根をもうちょっと取っ払って、内容を何にするかということを考えていくのがいいんじゃないかと思えます。

○会長

ありがとうございました。

教育内容として、せっかくだから入れ子にしながら教育していくという方策を考えると。その問題と、教員定数で張りつけた教員がどの程度の別科を担当できるかという問題はちょっとテクニカルになるので、そこは考え方としては整理する必要があるかなというふうには思います。

○委員

この話があってから、隠岐高校と水産高校が一緒になったらどうなるのかなとずっと考えていたんですけど、分かりませんでした。どういったことになるのかがイメージが湧かなくて、ですので、今日も皆さんの意見を聞くのがまず最初かなと思って、ずっと聞いていました。工業高校が地域のニーズという部分が大事かなと思うんですけど、実際、今、半分は市外から来られていて40人をという形なんですけど、これがもっと、80人というのになるのかっていうのがちょっとイメージが、いろんな魅力化頑張るのかもしれないし、ネーミングも大事かもしれませんが、倍というのがどうなのかなという、現実的には、この今日示された2学級、2学級が数字的には、クラスの配分的にはいいかなというふうには思います。

○会長

ありがとうございました。

○委員

先ほど〇〇委員さんがおっしゃったんですけども、本当に普通高校に入るのは、この高校がいいということではなくて、やっぱり人口減少地域においては、選択肢がそこしかないのだから、隠岐の場合もそうなんですけど、一応隠岐高校に入っとこうかなみたいな

のが結構選択されるわけで、多分その学校に通う目的とか、それから、将来の希望も様々、異なる生徒さんがいる中で、一人一人の選択肢を広げる、もっと魅力ある何か将来に向けて活躍できる、そういう夢を持って入るためには、私は専門的なこと分からないんですけども、もしかしたらこの学校に入りたいなという、入るところは自由に入れてみて、その後、本当にこの学級編制というか、自分のやりたい、行きたいって、そういうことができたらずばらしいなって。そのためにも、教員をはじめ地域の方も含めて、そういうたくさんの方の指導というか、支援というか、いろいろ援助する方がたくさんの方の方がいらっしやったら、それはそれですばらしいなと思うので、教育委員会さんが子どもの数を読めないのも、それは当然のことであって、だから、そういう違った角度で、さっき〇〇委員さんがおっしゃった、何か本当に魅力ある、まずこの学校に入りたいなと思うような、そういうような何か、子ども的人数ではなくて、そういうのができたらすばらしいなと思って聞いておりました。

○会長

ありがとうございました。

さて、ぐるっと1周回ってみました。いろんな御意見があると思います。皆さんおっしゃらなかった点を少し申し上げてみようかなと思っているんですが、別に私の中で結論があるわけでは全くないんですけども、こういった問題、つまり2つの、ある意味では性質の違う高校が一つになるというときに、ある程度の対等性というものが必要だろうというふうに思っています。住民の方にとっても、それから、入る生徒の心理的な問題、つまり、うちは減らなかったけど相手は半分になったぞみたいな。そういうのあんまりよくないなと思っていて、一定の対等性という問題は考えたほうがいいんじゃないかなというふうに、余計な考え方もかもしれないんだけど、ちょっとそこが気になっていて、そういう点から見ると、80、80なのを60、60にしましょうの120が、ある意味ではバランスの取れた案だというふうには考えます。

ただ、そこで教員が2減る、つまり、工業高校の側を減らすことによって、そこで教員数のマイナス2が出るということはかなり大きな問題なので、工業はじゃあ80でいくかとなったときに、普通科60とするかどうかという、40とするか60とするかという問題があるかなと。ここは一つ考えどころかなというふうに思っていて、120という数を決めてしまえばそういうバランスになるんですけども、60、80で140ってないのというあたりはどうなんだろう。

つまり、ちょっと気になるのは、人口減少に負けないというか、打ち勝つということを行っているわけだから、これ、減少率としては、160から120は75%なんです。この75パーセントという減り方は、今後の江津市の出生数の減少を上回っているんじゃないかと思うんですけど、その辺はどうでしょう。つまり、先を見越してそこまで減らすという考え方をするのか、それとも、ここから令和10年度までに、設置まで時間があるわけじゃないですか。言ってみれば、令和7年度に中学校に入ってくる人たちが卒業するまでにどんな学校にするのかという魅力をつくっていくということだし、それから、江津市外からも人を入れていくという発想をして新しい工業科をつくっていくっていうようなことしないと、80という人数をキープするにはなかなか難しいですよという議論がさっきからありました。だから、そういう意味ではここから少し時間かけて、この地域の高校をどういうふうに、いいものにしていくかという、そういう発想の中で、数としてはもう少し小さく刻んだらどうかということもちょっと思いますっていうふうに申し上げときます。

そうやったところで、高校の教員の人数は変わらないだよという計算になるのかもしれない、そこはよく分かりません。そこはまた教えていただければなというふうに思うんですけども、この際減らすという考え方であるのか、それとも、もう少し刻んで減らすという考え方であるのか、この辺は少し考えはあるんじゃないかなと思うんですが、それを今事務局に聞いてもなかなか難しそう。教育長さんは難しい顔しておられましたので、ちょっと御意見を伺ってみようかなと。

○教育長

今、定員が160ですけど、欠員状態であります。望ましい学校の形ではないわけで、定員、定員と比較すると75%、1クラス減りますけども、実際には現在も欠員であるし、それに近い形に持って行って、さらにもうちょっと減るので。今も120をセットしていますけど、普通に言えば100ぐらいで、120定員にしても欠員が見込まれている状況、そこを何とかいろいろ頑張って余裕もつけて120という全体数を今案として考えているわけですので、これがさらに増えるというのは、要は欠員が増えるだけの話だろうと。今でも、120でも初年度から欠員になるかもしれません。魅力的にして来てもらうのはいいんですけど、普通にやっていたら100ぐらいしか来ないので、それを少し余裕を持って魅力化して、期待も込めて120というセットをしていますので、これ以上はちょっと現実的ではない、空定員になると思います。これまで、普通科40、工業科80にして

いました。先ほど言いましたように、2コースと4コースをやって20人ずつの割り振りで、もちろん最終的に学校の定員はもう今もしょっちゅう変わります。来年なんか松江工業も1クラス減ってしまいます。2科を1つにして、40人、定員がなくなります。そういう具合に開校してからもしょっちゅう変わるんですけども、学科も再編したりします。今のセットとして我々としては、全部で6コースを20人ずつの120、頭が120人で、20人ずつの1クラスと2クラスというセットで最初御提示しましたけども、地域の方の声は普通科が少ない、最近の江津高校って、文系進学か資格職の進学がほとんどで、理系とかってほとんどいなかったんですよ、実際に。ただ、この春はちょっと理系が増えまして、理系進学が実際問題増えている。この地域のヒアリングで、理系が足りないという話。したがって、文系自体が少し40では少ないんじゃないかという御意見が地域の方からたくさんお寄せいただいているということでもあります。

片方で、工業で80本当にいけるかっていうと、これも期待値を込めての80でありますので、そういうこともあって、そういった地域の方の御意見を伺って、少し文系が増えた60、60という形というのを案1として、見直しのたたき台の一つとして、まず最初に御提示させていただいたということでもあります。

案2は、今の地域の勢いでいうと、普通科のほうのニーズというものが声としては大きかったのもう少し増やして寄せてみましたけども、もともと普通科が少なかったのもう普通科を増やせという声のほうが大きく出る、どうしても、物の聞き方として。工業科はそういった、多いから何も言わない、声として出ないという、そういう世論の聞き方といいますか、がありますので、仮に案2を、もしこれがいいとしてやったときに、今度は工業科が足りないと、地元ニーズもっとあるんじゃないかと、石見全体の工業教育を支えているんだと、江津だけじゃなくてですね、浜田にはありませんので、工業高校が。大きく県央、西部を支えているからもっと出せと、こういうような御意見がきつとこの後出てくるんだろうなというふうには思っていますけども、そういった意味で全体の120を変えないで、これは恐らくもうこれ以上は増えない、期待値込めて120なので、増えないということで、そこを固定して普通科と工業科のバランスを探ってみる。当初の案と含めると3つの案として、バランスとして、今、御提示させていただいています。

どうしても教員の数でいいますと、工業系のほうが生徒1人当たりの教員の数が多いので、いろんな科目が専門的にやらないといけない部分があるので、多いんですけども、なので工業を充実させようと思うと、できるだけ増やしたほうが、工業の人間を増やしたほ

うが、工業の教育は常勤、常勤講師ということは、要は補習もできるし、いろんな休みに指導もできたり、そういったことが、面接したり、いろんなケアができるというのが常勤教員のメリットで、授業やるだけなら非常勤の先生を雇って、その場だけ、時間だけ来ていただいてやるという手もあるんですけど、そういう方は補習とか、進路相談とか、専門性の進路相談とか、なかなかそういう時間を取るのが難しいので、できるだけ専門の方は常勤で採りたいことはやまやまなんです。なので、そういった生徒のバランス、生徒の人数のバランスと教員のバランスが、普通科と工業科の合体ってそういう意味で難しいんですよ。生徒の人数が普通科が多くて、教員は工業科が多くてということで、本当難しいんです。科目の開講自体は何とか非常勤の先生を県で雇って、授業開設とかはやれば何とかかなりますけども、そこら辺のバランスがニーズとして、地域のニーズを我々の案として出したものを地域の方に聞いてみると、もうちょっと普通科が地域は必要なんだ。工業も必要なんだけど、現実的に今1クラス分の人数のところを、じゃあどこまで伸ばすかと。コース別で計算するから80人になりましたけど、全体まとめてぎゅっとした場合は80まで要するのかというところが、一つ論点ではないのかなというふうに思っています。

○会長

ありがとうございました。

140はないということによろしいですかね。別に140にこだわっているわけじゃないんだけど、この間委員の方が来られて、江津高校、このところの人数見てくださって言われましたよね。このところの人数が、60、60、62というふうにしてキープしているじゃないかと、これ、60をキープしているものを40にしろという理屈がどこにあるのかということが分からない。そこをどう説明しますかということが1点です。

それからもう1点は、工業のところは、現状として50人を割る人数しかずっと来ていない。もし今、教育長が空定員とおっしゃるならば、工業の側の80のほうはむしろ空定員、それをどう考えますかと。それは、テクニカルに教員の数を増やすためですよという言い方ができるのかどうか、そこはいかがでしょう。

○教育長

普通科、五、六十来ていますけど、やはり全体としての総人数の減というのは、これ、間違いなくありますので、全体としては減らす方向になっていく。現に、今ゼロ歳の子、生まれた子の数ってもう変わらないので、向こう15年先まで入学生の数ってもうほぼ決まっているんですよ。これは動かせないの、よそからいっぱい来れば別ですけど、引

っ越ししてくれば別ですけど、島根県全体そういう状況でもないので、減る前提でものを考えていかないといけない。総数が減るといふ、そのときどこが減るのか、もう1個、どこへ逃げていくのか。片方で、私立高校がそのまま、全体減るんだけどそこに行く数が変わらなければ、普通科に来る子というのは減少率よりさらに低い率になってしまう。浜田方面に行く子も変わらなければ、子どもの数が減る部分は全部、江津高校にしわ寄せが来る、こういうことだってあり得るんですよ。それぞれみんな競争なので、取り合いがあります。もちろん負けないようにしないといけないけども、浜田も県立はみんな私の経営なので、両方大事なんですけども、そういう意味で、ぎりぎり見直しの頃40ぐらいとは思っています。さっき言いましたように、確かに最初の案は工業のほうが余裕は多い。ただ、どのコース選ぶのかが分からない。要は入学してから選ぶので、どのコース選ぶかは分からないというところがもう一つ不確定な要素があって、そこで少しずつ余裕を取ると、積み上がると、2クラス分になる。

最後の3ページの4でも言っていますけども、結局ニーズって、令和10年頃に入ってくるのはまだ小学生なので、今聞いても分かりませんし。例えばどの案にしても、進学希望とったら全然違うかもしれません。そのときはやっぱり少し考えないといけないと思う。実際に入ってくる今の小学生とのニーズのバランスですよ、学科のバランスが全然違ったらやっぱり考えないといけないと思います。それは、子どもたちが判断できる中学生になった頃じゃないと、ちょっと今聞いてもしょうがないので、今は想定の数値、これまでの傾向のバランスで将来推計を見ていくしかない。大きく変わるかどうか分かりませんが、一つの根拠だろうと、想定として用意しとく、我々が構えとして用意しとく一つの想定だろうとは思っています。

そういう意味で、我々も当初の案は、普通科がきつきつで工業に余裕があるということ承知の上で、でも、傾向的に一つのコース別の余裕を取ると、こういうことになったということでもありますけども、先ほど地域の方の御意見を伺うと、やはりもう少し普通科を増やすべきだと、特に理系というところをしっかりと入れてということになると。あるいはもう一つ、しっかりと地域密着のところもかなり強調されましたので、今3コース、3コース、普通科のほうはコース自体が一つどういう設定なのかっていうのは、カリキュラム的にはなかなか今具体的には分かりませんが、そういったニーズが現実にあったということで、普通科を増やした案を、2段階増やした案を今御用意させていただいたということでございます。

○会長

ありがとうございました。

冒頭のところで〇〇委員さんのほうから少しあったのは、もう工業科のほうがこういう規模でいいんじゃないかという意見があったのと、今、少しもともとの基本的な方針案のほうは少し矛盾する形になっていて、今、教育長さんおっしゃったように、80という人数を構えて頑張られるということで、4つの系を置いてというお話でありましたが、私が心配するのは、現状60来ているものを40、きつきつとおっしゃいましたが、それにしてくれと言った途端に入れなくなるという意識が地元で起こる。60を、60行っているのに40になるのって、このことが逆に人を出してしまう要因にならないかということがすごく心配なので、そういう意味では、現状来ている人数をキープしませんかというふうには私は申し上げたつもりです。

○教育長

そういう御指摘、御意見ございましたので、こういった案を見直しの案として、我々の基本的な案に全く固執しておりませんので、まず我々の想定として、いろんな分析から御提示した案を地域の方、あるいは、この間、参考人の方、委員の皆様、たくさんの御意見をいただいて柔軟に見直して、本当に江津の子どもたちにいい高校をつくりたいと思っておりますので、今、会長さんがおっしゃったようなことも含めて、新しい案として出させていただいておりますので、これも含めて御議論いただければと思います。

○会長

ありがとうございました。

少しちょうどの数にこだわっているんだけど、40とか、60、80とかですね。教員定数の決め方が40単位で決まっているからこうなっていくんだろうというふうに思うんですけども、今までの議論のどこだと、もともと出ている基本的な方針案、江津高校のほうを、普通科系の学びのほうを1学級40人、工業教育のほうを2学級80人という案、それと、もう一つは、本日で言う（案1）、普通科系が、これ、探究なんかも入っていて、この間、〇〇委員さんが、やはり島根の探究のところを一つ売りにしていくべきじゃないかっていうふうに言われたので、こういったところも含めて、3コース用意してある2学級60、工業のほうを2学級60、ただし、そうやった場合は常勤の教員が2人少なくなるという、そういうプランになっていて、この2つぐらいが今日は対象になって議論しているという認識でよろしいですか。

3番目の80、40の案で常勤が5人はさすがにないと思うので、この案の2のほうは当面今日は考えないということでもいいと思うんですけども、次回、人数に関しては、新たに案1と呼んでおきますけども、1ページにある基本的な方針案のほうは案1、それから、もう一つの2学級、2学級のほうを案2という形で、併記するかどうするかという辺りをもう一度検討させていただくという格好でどうかなというふうに思いますけれども、いかがでしょうかね。

○委員

会長のおっしゃる、現状は江津高校60人ぐらいのニーズであると、それを40に減らしたと、それは地元の意向に反するんじゃないかと、20人がアウトになるということですけどね。僕は逆に、普通科高校で今はほとんど全入という感じでもうほとんどバリアはない、そういうレベルで入ってくる。それで、40人のところに60人が受けるとなると、当然、競争率が高くなりますね。そうすると、やっぱり入ってくる子どもたちの質がある程度上がりますよね、普通科高校としてのやっぱり生徒の質が上がってくると。そうすると当然、大学進学実績にも反映してきて、結局、江津高校がやっぱりある程度入試の段階でそういうセレクトの要素を高めることによって生徒の質が高まる。それによって大学進学実績が出る。それによって江津高校の評価が高まる。それがやっぱりさらに吸引力を高める。そういった好循環も期待できるので、だから、ある程度江津高校の門は狭くして、どうも江津高校は難しいという子どもたちは江津工業に向かうのは、あんまりこういったヒエラルキーはつくりたくないんですけども、現実的な対応として、それがやっぱり両校が並立していく、共存していく道ではないかと。だから、一方では江津高校の質を高める、一方では江津工業の入学者を増やす、それを狙ったらどうかと。それはこの基本的な方針の理想像というんですかね、こうなればいいという私案です。

○会長

ありがとうございます。

入試の倍率を高めることが、子どもの学力、ある意味で競争にちゃんとさらすということによって学力が上がるということを狙いとするのだという御意見だと思います。そのことの論理はよく分かるし、ただ、答申案にそれ書くかな、正面から、60来てるところ40人にするのは入試の倍率を上げるためだというふうなのは、ちょっと私としては書きづらいなというふうに思うし、それから、もう一言言えば、浜田高校でも、北高でも、南高でも、そんな倍率にはなっていないというところをどうクリアするかということですけど。

県内どこの高校も1. 数倍しかなく、ひょっとしたら1. 何倍を割っているような倍率になっていて、そのことが全体の学力低下を招いているという議論があることは承知しているし、その倍率を上げていくべきだっていうことも、私も少し賛成なんですけども、ただ、それを代表として、この江津高校の統合の問題のときに持ち出して、倍率を上げるから質が上がるんだという議論をすることは多少危険な気が私はしますが。

○委員

おっしゃるように、かなりこの県教委が出す方針としてはね、なかなか言いにくいところはあるんだけども、やはり現実的にはある程度市場原理というか、マーケットのメカニズムをビルトインすることによって、潜在的な改善を図ると。だから逆に、定員を減らして競争率を高める必要が質を上げるということを表立って言わなくても、もう一つの潜在的なメッセージとしてこれをビルトインさせるという道もあるんじゃないかと、それが結果として、やはり両校が共存していく道になるんじゃないかという考えです。

○会長

ありがとうございます。

一つのアイデアとしてはあり得るなというふうに思います。私が心配するのは、理想的な競争原理を持ち込んだ結果、根こそぎいなくなるということが起こらないかという、そのほうがむしろ心配なんですけども、どうでしょうかというお話でした。

○委員

現場の土木関係とか、そういう工業関係の人のニーズをというのは分かるんですけど、今現状で、例えば高校なんかの入試の制度で、昔、私らの頃というのは、市外に行くのには、8%でしたっけ、何か枠があったんですけど、今現在、例えば浜田高校なんかそういうのを撤廃されているということは、多分、今回みたいにもし40人となるのであれば、私、江津の中での西の地域なんですけども、恐らくこぞって浜高のほうへ行くんじゃないかなということも十分考えられますし、学科のことに関しても、今ここで言うと、例えば自然科学系とかというのをやりたい子というのはもう恐らくみんな浜高に行くんだろかなということにもなるかなと思いますので、やっぱり江津で学んでというところを、地元のことをしっかり学んで地元で、定着という言い方はあれですけども、地元でしっかりと生活していくというふうな子ども育てるためには、やはり、今現状のニーズというのをしっかり捉えながら、今の、例えば60人ぐらい江津高校おられるのであれば、そこ絞るというのはちょっとやり過ぎなんじゃないかなというふうには、そうするともう完全に出てい

くばっかりになるかなというふうなところを危惧をします。

○委員

3 ページ目の中学生の意見を聞くという、その辺りにも関わってくるかなと思うんですけども、例えば、今現在の工業高校のイメージがあって、今現在の普通科というか、普通科のイメージがあって、新設校を建てるので、そこを取っ払って、将来の子どもたちだったり、その御家族に、自分がどういうところに進みたいかっていうのを考えられるような設計になると一番いいかなと思っていて、例えばポリテク島根との協働ということで、先に高校にいる間に大学の単位を少し取って有利に大学に進んでいくという、そんな道がすごく分かるような工業のコースがあるというふうなところがあつたときに、進学したいからといって普通に行っていた人たちが、どのぐらいこの工業の側に回ってくるだろうとか、この探究っていうコースを前回の意見を基に普通科のほうに足してもらっていたんですけども、これも企業との連携っていうことで、工業の部分でも十分にできるって考えたときに、探究の要素と進学の要素というのを工業科の中で実践するというのが分かるコースがあつたときに、どっちの科を選択しますかというふうに高校生、そして御家族に聞いたとき、その60の中のどのぐらいが工業のほうに回ってくれるかというようなアンケートなり、ディスカッションができると、多分この割合が変わってくるんじゃないかなと思ってます。

○会長

ありがとうございます。

先ほど私もちょっと言いましたけど、ここから令和10年度の設置に向けての数年間があるので、そののところって、眺めている数年間じゃなくて、多分動かしていく数年間だと思うんですよね。だから、そこへ向けて、やっぱり地域の高校をいいものにして、地域の中学生たちが希望を持って進学する場所にしようということで、江津全体でこのところを盛り上げていくという議論が必要で、その中の一環として、どういう高校なら行きたい、どういうものがあれば行きたい、どういうことが学びたいを中学生に考えさせるというのは非常にいい手だと思いますので、いい手というか、正当なやり方ですね。なので、そういうことも工夫してみられたらという意見をいただいたものと思います。

今、話が3ページに及びましたので、そろそろ後半の議論を3ページの議論にしたいと思います。今日ちょっと世知辛い話から入りましたので、すみません、定員の話から入りました。どっちを何学級にする、普通科系の学びをどうするということについて、もとも

と御提案のあった1学級40対2学級80、それから、今日、案1として出てきた2学級60、2学級60、それぞれメリット、デメリットがあるかというふうに思います。特に、もともとの案でいかれる場合には、やはり、現状60あるものを40にする理由、それから、現状50程度しか来ないものを80でキープしようとする理由、そういったことについては納得のいく説明をしっかりとすることが求められるかなというふうに思います。

その上で、これが工業科だけを魅力化すればいいというものではなくて、当然ながら普通科も魅力化していった人数を増やしていくということを考えるべきですので、そのことに係って、本日3ページのところで、新設校設置によって生まれる新たな学びというところで①や②を挙げていただいておりますので、その辺に係って皆さんのアイデアといひましようか、御意見がありましたら承りたいと思います。いかがでしょうか。

○委員

この1枚図もすごい分かりやすくていいと思うんですけども、先ほどの〇〇委員もおっしゃっていた、工業であっても探究的な要素というのは入れたほうがいいというのは何か僕もそのとおりだと思っていて、今これをぱっと見ただけですと、どうしても地域課題を探究し進学を目指すコースというところだけが、探究というものがすごい目につくんですけども、多分この新設校というのは、どのコースであっても探究的な見方、考え方みたいなものをベースとして持っていて、それをさらに、資格であったり、地域をさらに探究していくとか、大学進学をするとか、機械とかというふうに系統に分かれていくんじゃないかなと思うので、横断するものとして、探究的な物の見方、考え方みたいなものを新設校ではしっかり身につけて、それぞれのコースや系に進んでいくというような何か見せ方が一ついいんじゃないかなというふうに思いましたというところが一つと。

あとは、この1枚図でいきますと、この新設校と県立大やポリテクカレッジをつないでいるその真ん中にあるものが、多分コンソーシアム的な存在になってくるのかなというふうに思ったときに、それこそ前回の審議会のところで、藤田さんとかがお話をされていましたが、ああいった方々のような組織もうまく巻き込みながらこの真ん中でうまく歯車のような形でやっていくという、何かそういう図なんかが示せるといいんじゃないかなというふうに思いましたので、ぜひこの探究というものを全ての普通科系、工業系関係なく、横断的なものであるんだというところが見せられるといいんじゃないかなというふうに思いました。

○会長

ありがとうございました。

非常に大事な視点で、実をいうと、普通科よりも、よりもっていうのは変だけど、専門的な工業とか、商業とか、農業とか、そういうところの探究が実は今求められていて、昔でいえば、工業というともう決まった技術、物すごい旋盤とかねじとかという、そういうことの技術を身につけてみたいなことだったけど、今は多分それでは駄目なので、やはりもう少し、先ほどから進学の問題も出てきているように、工業系の学生についても同じように探究の学びを基礎に置いて学ぶことがいいんじゃないかという御指摘が1点目でした。

それから、2点目は、やはり高校を魅力化することによって地域全体を魅力化していく、地域の力を借りて教育の力にしていき、教育の力を地域の力にしていくという、島根県がこここのところずっと考えてきたようなパターンを、きっちりこういう地域でも生かすべきではないかという御意見を2点目としていただきました。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

御自由な意見をということで、あと30分少々ありますので、何か新しい高校についてこういったアイデア、こういった角度を盛り込むことが重要ではないかという観点を少しおっしゃっていただければ、全部が全部答申に入らないかもしれないけど、いろんなアイデアを出していただくことは非常に重要だと思いますので。

○委員

ちょっと話がずれたら申し訳ないんですけども、実際今、工業高校の卒業生で、みんながみんな工業系の学校に行っているかということ、実はちょっと違って、3月に卒業した生徒の中で、美容系の学校に行った子も二、三名おられます。また遡ると、看護学校に行ったりとか、介護の仕事、パンの製造工場とか、いろんな分野で働いております。現在、現時点で私が高校、工業から聞いているのでは、今3年生が、約50はいかないぐらいなんですけども、就職がほとんどで、3名ほど進学する。そのうちの3名がみんな工業系のところに行くのかっていったら、私が知っている限りでは、1名はブライダル関係の学校に進学するという子もいます。実際、工業も1年生のときから建築、電気にすぐ分かるかといったら、そうではなくて、両方やって、それから自分がどっちに行きたいかコースを決める。機械、ロボットもそれぞれやってどっちに行きたいか決めるというふうになっているので、工業科と普通科系と違って分けてもいいんだけど、ちょっと最初の1年生の年は一通りやってみて、自分はちょっと電気が好きかも、機械が好きかも、やっぱり自分

は進学とか、看護師さんとか栄養士さんとか、そういったちょっと資格職をやってみようかなとか、いろんな目線で見ることでもいいのかなとは思いますが、教育委員会の方とかがどのように考えているか分からないんですが、ちょっとやっぱり工業というと女子生徒とかが入りにくいとかということも分かりますし、実際女子生徒も少ないし、女子生徒って、みんなが工業系の職に就くかといったら、あんまり就かないところがあるので、そういったところも考えてもらえたら、また女子生徒の方も入ってくるかもしれないし、いろんな視点で生徒も見れるんじゃないのかなと思いました。

○会長

非常によく分かることと同時に、テクニカルにすごく難しいなというふうに思いますね。定員というものの置き方をどうするかということで、今、工業高校と普通科系の高校という定員の数え方、それを1年生を全部一緒にとつといて、自分が半年なり1年なり学んでみて、どちらかにするかで進路を決められるというようなシステムになれるかどうかということなので、そこのところは本当に学教法上の問題というか、施行規則上の問題ですよ、その辺はどうなんでしょうね、可能性は。総合学科ならあるんだけど、そこがなかなか普通系の高校と工業系の高校では違うんじゃないかなというふうに私は思うんですけど、そこ、どうですか、事務局。

○事務局

先ほど委員が言われましたように、両方を学んでという形になって、後ほど選択するというと、まさに総合学科という格好になろうかというふうに思います。ただ、総合学科は総合学科でカリキュラム上の縛りがあるので、選択した後、限られた時間内に専門性の高い資格取得に向かった学びということになると、ちょっと時間的に厳しい部分もあり、大体総合学科で工業系を構えている県外の学校なんかは、主には次の、上の上級学校に向かってそういった資格を目指すようなケースが多くなってくるので、こちらで考えている江津地域の中での工業教育、専門性というふうに考えると、やっぱりそういう最初の選択のゆとりのある時間を十分に持つことって難しいのかなというふうには今のところ考えています。ずっと研究はしていこうとは思っているんですけど。

○会長

〇〇委員さんがおっしゃりたかった趣旨は、多分自分の適性ということについて自分がしっかり考えられるような、いわゆる進路選択ですね。それが、一回入ったらもうそこしかありませんみたいなことじゃなくて、もう少し柔軟な進路選択ができる機会のある学校

といういき方のほうがいいんじゃないかと。現に、今でも卒業してから全然違う系列の学校に行くこともありますよということですよね。そういった御意見だと思って、もし、入学のときに一定の縛りを外して後から選択できる仕組みが入れられるとしたらどの範囲なのかということについては、検討してみられる余地があるんじゃないかというふうに思いました。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

これ、中高一貫みたいなことは考えないんですかね。何か県が嫌がることばかり今日言っていますけど、そういう意味ではないんですけど、工夫のしついでですので、いろんな工夫の仕方があるかなと思ったりもいたします。あんまり今のところそういう設計は入れてないですかね。隣に中学あるような気もするんですけど、江津工業。これ、なかなか中学は義務教育段階ですし、高校は県立ということで、様々な地域がそういう発案はあるけど、あんまりこれまで積極的な検討はしてこなかったということですが、一方で、全国的にいうと、いわゆる中高一貫教育というのが一定程度の枠の中で行われてきてもいるなと、この辺を今後、県がどう考えていくかという問題でもあろうかなというふうに思います。地域の公平性とかですね、江津はほかにあと3校ありますから、ほかの中学校とのバランスがどうなのかとか、そういう問題も非常に難しい問題だということは理解しているんですけども、いかがでしょう。

○教育長

島根県で中高一貫やっているのは、飯南高校と吉賀高校。ともに、あまりほかの地域から、地元の高校と中学も少ないので、かなりそこを基本的に結びつけてやっつけば、ほかからも来ますけども、ベースが大きいのである程度成り立つだろうと思います。江津の場合は、中学が何校かあるのと、やはりもう少し山間部のほうから出てくる、要は市外の学校からも入ってくる子どもたちもある程度期待をしているので、一貫校以外の生徒もかなり出てくるだろうと思ったときに、バランスとしてどうなのかなということを、そこでちょっと中高一貫校はそれ以上は考えなくて、むしろ高校との一貫教育とって、今の県立大学とか、ポリテクカレッジとか、言われましたように、単位の事前履修といいますか、高校のうちに大学の勉強をして、一緒に勉強して大学へ入ったら、何もせずに単位がもらえるとは思いませんけど、レポートだけで単位がもらえるようにすれば、その時間、授業の時間はもうフィールドに出て学びが展開できるとか、そういった先取り履修とか、さっき言った7年連続した履修計画を立てるとか、ポリテクだったら5年連続の履修計画を立

てるとか、そういったのがこの江津にある高校として、隣の近い浜田だったり、市内のポリテクとかいうところで連続性が、特に江津高校なんかも探究を、地域密着一生懸命やっていますから、浜田キャンパスと親和性が高いんですよ。大学なので、書いてありますけど、いわゆる附属高校的、附属高校にはしませんけども、附属高校的にしとくと、大学は附属高校から入ってくるとよそから入ってくると全然お構いなしなので、そっちのほうでむしろ魅力を高めて、この新設校行けば県大、地域学びしたかったらもう7年一貫で、人よりも先に先にたくさんできるというようなのを魅力にしたいし、ポリテクだったらポリテクの設備、素晴らしい設備がたくさんありますから、そこへ行って先に技術を学んで身につけて、何ていうか、ものづくりなりいろんなどこへもっと高みを目指せると、人より先んじていけるような、そういったのが売りになるんじゃないかなと。そういった人材育成って、この新設校だからできるんじゃないかなというふうに思って、こういう上の一貫教育をちょっと考えてみました。

○会長

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

○委員

今の附属高校的な学びのところで行くと、これも本当に、今日いろんなアイデアを言っていていいという場であることを前提に、ちょっと突拍子もない話になってしまうかもしれないんですけども、附属高校的な学び、7年間のスパンでということ、僕は非常に素晴らしいと思っていて、であれば、例えば指定校みたいなもの、基本的に国公立って指定校ないと思うんですけども、例えば横浜市立大学さんとかは指定校があるんですよ、いわゆる公立大だけでも指定校というものがあったりするので、この新設校だけに指定校出すというのは不公平感を生むかもしれないんですけども、その先進的な事例として、島根県立大学とかポリテクカレッジから指定校制度があるみたいなものなんかがあると、一つ魅力にも映るだろうし、附属高校的な学びというものが本当にある意味、進路保障という面でもされていていいんじゃないかなというのは、一つアイデアとして思いました。

○教育長

県立大学は既に、県立高校に対して全部指定校推薦というのがあるんですけども、ねらいはもう少し枠をとることと、ここから行けば落ちないといいますか、指定校制度でも落ちる推薦もありますから、ここの枠の拡大とかですね、これ、相手のあることなので、

交渉なんですけども、やっぱりそれだけの魅力のある、少し入学卒を増やしていただいて、受験心配せずに上の学びができるみたいなことができたらなとは思っています。

○会長

今、江津高校のほうから大体10人弱ぐらいの生徒さんが県立大学のほうには進学していますよね。それから、工業のほうはもちろんちょっと、県立大学はどっちかといえば文系という見方なので、数としてはゼロということになっているんですけども、今後は地域というところに向かって進学することも考えられるなというふうには思います。

ほかにいかがでしょうか。

○委員

先ほど〇〇委員さんがおっしゃったんですけども、その学校に行くのは本当にその選択の中でそこが近いから、通学可能なところに学校があるからという、そういう理由で通っている子どもさんも多分たくさんいらっしゃるのではないのかなと思ったりもするんですけども、さっき一貫校の話も出ていましたけど、例えば小・中なんか、私なんか小さい村でしたから、もう必要とされなくても必然的に一貫校、それしかできなかったのだから、それと一緒に、もしかしたらこの減少地域での一貫した教育というのはどうなのかなとちょっと疑問視するところはあるんですけど。

それから、私は隠岐でもよく、教育長、目の前にしていますけど、思うんですけど、例えば小学校なんかの統合にしても、そのときの一応責任というのはその町村長のわけですけど、これは県立高校でありますよね、江津高校も、工業高校も。だけど、ともすれば江津市単独問題のここのように、あるところでは議論されていたりするんですけども、地域の今後の検討に当たってのところもここに記載してあるんですけども、開校まで地域のニーズをそんなにまで取り入れる必要があるのでしょうかと私は思ったりもしています。本当に子どものこれからの将来のこと、それから社会のニーズ、これはすごく大事だと思うんですけども、これから島根の子どもがどこの学校に、どこの地域じゃなくてどこの学校にじゃあ行くかと、進路を考えるとときに当たっても、やっぱりその地域というのを多少なりとも、それ、開校後は地域に協力してもらって連携してきて、地域の透明性ももちろんいただいた中で進めていかなくちゃいけないと思うんですけど、やっぱり地域のニーズというのは、前回すごく私、そのことで疑問視しましたけど、やっぱりすごく、何%ぐらいウエートを占めるものでございましょうか、地域のニーズを取り入れながらという言葉。

○会長

地域のニーズも様々で、いわゆる具体的に学生の育つ姿に対しておっしゃるケースもあれば、むしろ出てからの就職についておっしゃるケースもあれば、地域のニーズというものも出てくる団体さんによって大分違います。大学も地域のニーズに根差したということ言うんですけども、そのときにも、例えば産業界の方々にアンケート調査をしますみたいなことをするんですけども、それでも日本全体の目標と大きく違ったことを特別におっしゃるケースはそんなに多くはないなというふうに思っています。これからのどの地域でも、あるいはどの世界でも求められるようなところについて、例えば人と協力しながら自分らしい考え方を発揮するとか、あるいは様々な価値観の違う人とのコミュニケーションを重視するとか、そういった様々なニーズというのは、そんなにこの地域独特のニーズという感じのものではないなというふうに理解しています。今、〇〇委員さんがおっしゃる地域のニーズをどのくらい受けなければならないかという、その話はどのような感じのニーズなのでしょう。

○委員

前回の江津市の方々のたくさんの4人の方のいろんな御意見お聞きしていたんですけども、これは江津にまた戻って来いと、そのためにこの方たちは発言しているのかなと思いつつながら。でも、例えば自分の子どもなら、自分の子どもが将来どういうふうに向かって、どういう方向性で、どういう夢を持って生きていくのかな、その選択肢の中にやっぱり江津に残りたいと思うならいいけど、どうなのかなと思いつつながら、あまり地域地域と言うと、何か子どもを考えたときには地域はもう私はそんなに重要視、教育委員会の方もすごく気を遣われている発言されているところもあるんですけど、そんなに気を遣わなくても、親だったらそうかなと、人の子と我が子は違うので、我が子だったらこの将来に向けてって思うのが。

○会長

今、くしくもおっしゃいましたけど、自分が親として発言するか、地域の人間として発言するか、あるいはもうちょっと広い視野から発言するかということによっても大分立場が違ってくると思います。そういう議論をし出すと、自分の子どもはと言われるとなかなか弱いところがあるんですけども、ただ、ここで議論していることは、やはり地域のよさを感じながら育ち、それから、地域には様々な教育資源があるので、その資源を活用して学習することが、どの地域に行っても、あるいはどの国に行っても役に立つ内容になりますよということであり、その先どこで自分が活躍するかはもちろん子どもの自由な選択に

よるものであり、その先にやはりこの地域のことがいつも気になって、この地域のことで自分の活躍できる場があればと考える人になってくれればという、その範囲で私たちは地域という言葉を使いながら議論しているんじゃないかなというふうに私は理解していますけど。地域にしか残れない教育をしているみたいな話になると、ちょっとそれはややしんどい話になりますよね。

ほかにいかがでしょうか。

○委員

先ほどのコメントの中で、家から通えるということが大事だという、そのニーズは高いなと思っていて、この学校の地域性とか、ある場所だとか、これまでの背景なんかを考えると、進路が柔軟に後から変化してきたときにそれに応答できるカリキュラムがあるというところが大事じゃないかなと思っていて、先ほどの枠組みの普通科と工業とのこの移動というのは、制度的に難しいのかもしれないけれども、運用の中でどうにかしていくという要素が見えるところが、もしかしたら親御さんだったり、子どもたちに求められているかなと思ってまして、例えばですけど、先ほどの大学との連携というところで、例えばどの大学の、どういう内容の単位だとか授業というものを取れるというのが、自分の所属する学科に限定されないだとかってというのは、何か工業だからこそ、工業の専門性の高い授業が受けられるということではなくて、例えばさっきおっしゃったとおりで、工業の中にいるんだけど、工業系のことでは将来進んでいきたいんだけど、例えば国際学部とかそういうところに興味があるんだったら、その単位は取りに行けるというような形で、運用の部分で、工業だとか普通というところを選択したがゆえに3年後の自分を規定しないというか、どんな学びでも割と柔軟にできるような設計を、何かどのぐらい書面に出すかは別として、少なくともそんなふうに考えて、工業に入ってずっと3年後も私は工業に興味があるだろうかということのをそれほど心配せず、いや、その後じゃあ看護に行く、保育に行く、ブライダルに行くという選択肢をしたとしてもサポートできる、例えばこういうコースが見え方としてありますよというようなことが出せるような融合の仕方があるといいんじゃないかなと思います。

○会長

ありがとうございました。

これ、口で言うのは簡単なんだけど、制度としてつくるのはなかなか難しい。つまり、授業科目の選択制、それから、ひいてはいわゆるどこで卒業するかという進路の選択制、

これをできるだけ柔軟に設計することが一つの魅力になるんじゃないかという、先ほど〇〇委員さんからもありましたが、そういった意見として承りたいと思いますし、その辺が少し文言として落ちれば工夫の余地はあると思うので、また設計のときにお考えいただければいいかなというふうに思います。

ちなみに、そのことでお聞きしますが、普通科系で入学する、工業系で入学するといった場合の、普通は工業系でやめてほかへ、普通科へ変わろうと思ったら転校ってなるんだけど、この学校の場合はどうなるんでしょうか。転校ということではなくて、校内で移動ができるかということについてはどうお考えでしょう。

〇事務局

校内で複数の科があった際に、科をまたいでの籍を移動するケースというのはごくまれではありますけども、ございます。制度が、転科という表現にはなるんですけど、例えばというと、宍道高校の定時制課程から通信課程、これは転科という形で、途中で変換されたりとかというような場合もございます。

〇会長

ありがとうございます。

あんまり積極的に活用するケースとして設計されてないんですね。だから、やむを得ない場合にそれができるような読み方に今なっていると思います。ただ、今、大学なんかでも、転学部、転学科というのは、もう少し積極的に進めるべきじゃないかという議論もあって、いわゆるミスマッチを入学後に解消する。もう行き詰まったら退学というか、やめるしかないのかとなったときに、もう少し違う進路の作り方があってもいいんじゃないかという議論は起こっているんで、そういったことも踏まえていただければというふうに思いました。

ほかにいかがでしょうか。

〇委員

今のお話とか、〇〇委員の話とかも、何か僕も基本的にはそれ賛成というか、じっくりいろんなものを見てから選んでいくというのがいいんだろうなというふうに思っていて、何か一つ、考え方として大事だなと思うのは、なりたい自分としたい自分とって、何か両方で考えていくことが大事じゃないかなと思っていて、割とやっぱり子どもたちってなりたい自分で自分の将来を考えがち、例えば看護師になりたいとかというふうに自分の将来を考えていくんだけど、じゃあ、何がしたいのと言ったときに、実は、例えば看護師

になりたいと言っていた子たちも、何がしたいのというふうに問うていくと、例えば多くの人の命が救いたいと、であれば、それって看護師だけじゃなくいろいろなアプローチがあるよねというふうに、どんどんどんどん進路の選択の幅とか自分のキャリアの作り方の幅が広がってくると思うので、何かそういった、やっぱり最初から普通系か工業系かとかで選ぶという時点で、何となくになりたい自分から片方の選択肢を消していったような、やっぱりそういう印象があるので、いろんな制度的な難しさはありながらも、なりたい自分としたい自分とこの両方を俯瞰しながら自分の将来を考えられるような、何かそういったコンセプトになるといいんじゃないかなというふうには思いました。

○会長

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょう。そろそろの時間にはなっているんですけども、今まで出てない視点だけ一つだけ申し上げたいんですけど、江津地域、2つの高校1つにしてというときに、今の高校生の実態から考えると、一定程度支援の必要な子どもたちが存在するというふうに思われます。工業にも普通科にもですね。大学も実をいうとたくさんの支援の必要な学生がいて、今、本学でも100人ぐらい、全学で100人ぐらい支援を必要とする学生がいます。そういったことを考えたときに、これ、高校生ですので、障害の支援という言い方をしなくてもいいかもしれませんが、学習支援、生活支援、様々な支援の充実ということも一つ考えておく必要があるかなと思って、そのことは申し上げておきたいというふうに思います。

まとめというほどではないんですけど、今日の議論の総括として少しお話しさせていただくと、2つの高校を統合して魅力のある新しい高校をつくりましょうという、前回確認させていただいた点は動いていない。

それから、2番目に、県内で初めてになりますので、普通科系、それと工業科の併設ということになりますので、両方の特色を生かして、これまでなかったような教育ができるような形にしましょうと。例えばという話で少し幾つか今日出てきたのが、選択性が広いとか、幾つか具体に出てきました。今日、ポリテクとの接続とか、島根県立大学との上に向けての統合、統合じゃないんですけど、上に向けての併設校的な、そういう附属校的な扱いにしましょうみたいなアイデアも含めて、進路先が豊かになるというか、進学先が豊かになるようなそういう設計なりにしましょうというのも、今、2番目に申し上げた、初めての新設校として融合することで得られる、そういう特色を出していきましょうという

話になると思います。

こういう話についてはまた今後もアイデアをいただけたらと思いますので、次回までにまた皆さんもいろいろ考えていただいて、御提案いただくことができれば少し入れていき、今度は多分、答申の形の原案が出てくると思いますので、答申の原案にどんなことまで盛り込んでいくかという話になりますので、その中にアイデアを少し、こうしましょうじゃなくてこういう考え方もあります、こういうふうにもできるんじゃないですかということとを並べていければいいかなと思っているので、そういうアイデアをお願いします。

それから、1学年の人数については、120というところを基本にしながら、普通科系が何人、工業科系が何人、あるいは何クラス、そのつくり方は様々なメリット、デメリットがあるし、それから、現状との乖離の問題や、今後の見通しの問題が様々含まれるので、どのパターンでいくにせよ、県民、特に江津の方々に納得のいくような説明をつけていくということが必要になるとと思いますので、その部分について御検討をお願いしますということが3点目です。

以上、簡単にまとめさせていただきましたが、こういった話で今日よかったでしょうか。

そうしましたら、本日も大体与えられた時間になりましたので、この辺にしたいと思います。